「国語教育研究」第六十四号（令和五年三月刊）
【第63回広島大学教育学部国語教育学会・研究協議】2

教科横断的な視点で構想する国語科授業

――新領域「光輝（かがやき）」との関連の中で――

西村尚久

1　はじめに

稿者の勤務する広島大学附属三原学校園（以下、本学校園）は、幼稚園、小学校、中学校の一二年間一貫教育を行う学校園である。本学校園では、文部科学省の研究開発学校の指定を受け、平成二四年度から平成二九年度まで新領域「希望（のぞみ）」、平成三〇年度から令和四年度まで新領域「光輝（かがやき）」という二つのカリキュラム開発を一一年間に渡り実施している。これらは、資質・能力をベースとした幼稚園・小学校・中学校の一二年間一貫カリキュラムとなっている。

本年度は、新領域「光輝（かがやき）」の研究開発最終年度となっている。新領域「光輝（かがやき）」とは、高度に競争的でグローバル化された多様性社会に適応するために求められると本学校園が考えている三つの次元（躍動する感性、レジリエンス、横断的な知識）の基礎となる資質・能力（人間味溢れる豊かな感覚、自ら学ぼうとする姿勢、粘り強く取り組む力、コラボレーションする力、複眼的に思考する力、知識と知識を関連付けながら追究する力、論理的に問題を解決する力）を育成するための幼小中一貫のカリキュラム開発である。

具体的には、道徳・特別活動・総合的な学習の時間の全ての時数と各教科時数の四分の一程度を上限に含んだ新領域「光輝（かがやき）」を小学校・中学校に設置する。理由は、新領域「光輝（かがやき）」の単元として、行事と教科を関連させた単元や、合科的な単元を実践することで、子どもたちが、教科や領域の枠組みにとらわれず、幅広い視点で物事をとらえ直す機会を授業において設定するためである。

新領域「光輝（かがやき）」で開発される単元は、行事を中心とした単元や、行事と教科を関連させた単元、教科を中心として、合科的、横断的な単元といったものを想定している。また、新領域「光輝（かがやき）」に、道徳、特別活動を組み込み、「倫理的なことや行為の在り方」を、実践を通して考えたり、「自治」を体験的に学ん

だりすることのできる単元を開発する。
本稿で紹介する単元は、新領域「光輝（かがやき）」に関連する単元として構想、実践されたものである。

2　新領域「光輝（かがやき）」で育む三つの次元と資質・能力

現代社会は二〇三〇年あたりをめどに、情勢が大きく変容し、その変化を予測することが困難だと言われている。このような社会は、「予測困難で不確実、複雑で曖昧」なものであると言われ、それぞれの頭文字を取って、「ＶＵＣＡ（Volateile, Uncertain, Complex, Ambiguous：ヴーカ）」と呼ばれている。

また、技術革新により、一つの出来事が広範囲かつ複雑に伝播するような情報化社会が訪れることが予想される。このような技術革新により、さらにグローバル化が進み、ボーダレスな社会へと変化する中で、多様な人々の交わりやそれに伴う社会、文化の交流など、これからは多様な価値にふれることの多い、多様性社会も到来すると考えられている。

そのような社会が訪れることを想定すると、これまでの教育について見つめ直し、教育のあり方自体も変化する必要があると言える。教えやすくテストしやすいことは、デジタル化、オートメーション化されやすく、これからの社会ではコンピューターやＡＩに取って代わられるものである。これまでの教育のあり方では、学校で教師から与えられた課題だけをこなしているような姿も見られ、子どもたちが学校で習得した知識や技能を十分に生かしきれず、その結果、目まぐるしく変化する社会に対応できない可能性がある。そのため学校教育自体が、子どもたちに汎用性のある横断的な知識を身に付けさせ、めまぐるしく変化する社会を乗り切るための適応力を育む教育に転換していくことが求められるのではないだろうか。

また、これから普及してくるＡＩには備わっていない、価値あるものに気付く感覚と、その感覚に基づいて「知りたい」「学びたい」といった前向きな行動に自らをつき動かす感性も、学校教育で身に付けさせなければならない重要な土台である。同時に、様々な課題が複雑に絡み合い、先が見通しにくい社会を生きていくには、これらの力一つ一つに注目するのではなく、相互の関係性を捉えて幅広い視点や枠組みで育むことが必要になってくるだろう。そのため、「次元」という資質・能力の枠組みを設置し、資質・能力の関係性を意識しながら幅広い視点で資質・能力を育んでいく必要があると考える。

ここで示す「次元」とは、資質・能力を広範的に包括する枠組みである。資質・能力を育成することの重要性については、日本の学習指導要領改訂はもちろん、諸外国で資質・能力に相当するコンピテンシーが重視されていることを見ても明らかであり、これからの社会を生き抜いていくためには、欠かせない視点である。資質・能力は、統合的なものであり、なおかつバランスよく育成されなければならない。相互に関係し合うものでもあることから、お互いの関係性を重視する必要性がある。それらを包括する資質・能力の枠組みとして、私たちは「次元」という言葉を用いて定義している。そ

の枠組みの中で育まれるべき資質・能力を「基礎となる資質・能力」と位置付けた。

これからの高度で競争的なグローバル化された多様性社会を生き抜いていくためには、人間にしか育むことができない①躍動する感性、②レジリエンス、③横断的な知識、これら3つの次元の基礎となる資質・能力を子どもたちに身に付けられるようにしていくことが必要不可欠になってくると考える。

三つの次元によって包括される資質・能力は以下の七つである。

【躍動する感性】

「人間味溢れる豊かな感覚」…未知なものや自分とは異なる考え方に興味・関心をもつ。

「自ら学ぼうとする姿勢」…学ぶことに対し、自分で価値を見出し、意欲的に打ち込む。

【レジリエンス】

「粘り強く取り組む力」…困難な状況においても挑戦し続けることができる。

「コラボレーションする力」…公正な態度をもって、価値観の異なる他者と協働することができる。

「複眼的に思考する力」…一つの出来事や事実を多くの異なる視点から違う見方をすることができる。

【横断的な知識】

「知識と知識を関連付けながら追究する力」…学習したことと学習していることを関連させて考え方を広げ、どこまでも深く調べて明らかにしようとする。

「論理的に問題を解決する力」…根拠に基づき、筋道を立てて考え、問題を解決することができる。

3　国語科の取り組み

本学校園国語科の目指す子どもの姿は以下の通りである。

> 言葉による見方・考え方を働かせ、仲間と協働し、課題解決に向かうことで、言葉への自覚を高められる子ども。

高度情報社会においては、さまざまなメディアを通して、大量の情報が行き交う。メディアの発達により、映像・画像情報のやりとりも容易になったが、ＳＮＳをはじめとした、子どもたちに身近なメディアにおいては、依然として言語情報が主たる位置を占めている。子どもたちは日々、シャワーのように言葉を浴びせ合っている。ただし、その言葉は玉石混淆であり、言葉が悪い方向に働くことも珍しくない。

例えば、日常生活におけるＳＮＳを介したやりとりで、誤解が生じたり、人間関係が悪化したりすることは、今や日常的なトラブルになっている。このような高度情報社会においてこそ、言葉による見方・考え方が大切になってくる。先に例に挙げた、日常生活のＳＮＳを介したコミュニケーションは、身振りや表情などのノンバーバルな要素をほぼ排除したものであるため、適切なコミュニケーションを成立させるには、言葉に頼ることになるからである。さら

に社会生活においても、端末を介した協働の場面は、コロナ禍を経て、加速的に増えていくであろう。GIGAスクール構想が実現し、子どもが一人一台の端末を保有するようになったので、学習者同士が端末を介して協働する状況も考えられる。

このような社会状況をふまえて、目指す子ども像を設定した。子どもたちには、言葉を正確に理解し、適切に表現するための見方・考え方を働かせることで、仲間とのコミュニケーションを円滑に行い、一人では解決できないような課題を、解決できるようになってほしい。そして、このような言葉の学習の有効性を実感することで、「言葉を介して自らの生活をより良くすることができる」という言葉への自覚を高めていってほしいと考えている。

さて、目指す子ども像の視座から、本学校園の子どもの現状を俯瞰すると、国語科においては、言葉による見方・考え方を働かせる姿は見られるものの、日常生活や他教科においては、国語科で経験した言葉による見方・考え方を、充分に働かせているとは言えない。国語科の学習が、国語科だけで完結してしまっていると考えられる。本学校園の「光輝（かがやき）」は、教科の枠組みをとりはらった領域である。国語科の学習内容を「光輝（かがやき）」に拠出することで国語科の学習内容を「光輝（かがやき）」との関連のなかで双方向的に活用することで、国語科だけで完結しがちな学習を、日常生活や他教科に強くつなげられる可能性があると考えている。

「三つの次元を高める国語科での具体の姿」を次のように設定した。

躍動する感性…文章に込められた意味を考えたり、文章から学んだことを言語化したりし、自分なりの解釈や価値を見出そうとしている。

レジリエンス…言葉を通して多面的・多角的に考えたり、仲間と議論したりして、困難に対して、粘り強く課題解決に向かっている。

横断的な知識…言葉による見方・考え方、文章を読んで身に付けた知識を、日常生活や他教科における課題解決に役立てている。

三つの次元を高める国語科の在り方として、先ず重点をおきたいことが、子どもたちが自ら追究したくなる、魅力的な単元開発である。魅力ある単元が、子どもたちがもともと秘めている「躍動する感性」や「レジリエンス」を起動させ、より伸ばしていくのである。例えば、子どもたちが授業で学校図書館を利用する場面を想定してみよう。子どもたちに、特段の課題意識もない場合は、目に留まる本は普段とさほど変わらないであろう。一方、魅力ある単元が設定されており、子どもたちに課題意識が芽生えていた場合は、普段目に留まらない本が魅力的に映ることがある。ここに、躍動する感性の萌芽を発見することができる。また、このような魅力的な単元開発は、レジリエンスの高まりにもつながってくる。子どもたちのなかに、「自ら課題解決したい」という、学びに向かう衝動があるからこそ、学習に粘り強く取り組み、言葉を通して多面的・多角的に考えたり、仲間と協働したりする姿が生まれるからである。

次に重点を置きたいことが、学びの振り返りである。振り返るこ

とで、言葉の学びを客観視して「レジリエンス」を高めたり、国語科の知識・技能を「横断的な知識」に昇華させたりすることができる。ここで重要なのは、振り返りを国語科内だけで行うのではなく、国語科外、例えば「光輝（かがやき）」で国語科の知識・技能を用いて、どのように思考・判断したかという振り返りも同時に行うことである。このように、国語科と「光輝（かがやき）」を往還させることで、国語科の知識を横断的に活用する意識を高めたり、「光輝（かがやき）」での実践で国語科の知識が活用できた成果、あるいは、充分に活用できなかった至らなさを自覚したりして、さらなる力の高まりにつなげていくことが出来ると考えている。

4　授業の実際

以下に、新領域「光輝（かがやき）」に関連して実施された単元を紹介する。これまでの研究開発の中で、「光輝（かがやき）」との関連の中で実施する各教科の授業は「内容でつなぐ」ものと「方法でつなぐ」ものという整理がなされてきた。本稿では「内容でつなぐ」単元を紹介する。

「理想的なリーダーとはどのような者か」という学習課題を中心にして国語科の学習と「光輝（かがやき）」の学習を関連させて構想した実践である。文学教材「兄やん」[1]を読み、理想的なリーダーについて考える。「光輝（かがやき）」の単元「スタート☆トレーニング」[2]や「運動会」での取り組みを踏まえ、実際に自分たちの活動を振り返りつつ、「リーダー」についての考えを再検討することで、教室だけでなく、日常に生かすことができる学びの構築を目指した。

（1）　単元名　理想的なリーダーってどんな人？

（2）　単元設定の背景

教材観

本単元は、「兄やん」という文学教材を読解することから学習をはじめる。本単元で扱う文学教材「兄やん」には、グループのリーダーである「兄やん」が、グループの取り決めを破った「テツオ」に接する姿が描写されている。「こんなことがみんなに知れたら、テツオはのけ者にされる。」と考え、「テツオ」に注意することができない「兄やん」の姿は、「理想的なリーダー」について考えるきっかけとすることができる。

生徒観

中学一年生の生徒については、年度当初のアンケートの結果を見ると、「国語の授業は好きですか」の項目に肯定的な回答をしている生徒は五四％（七九名中四三名）。「文学的な文章を読むことが好きですか」という項目に肯定的な回答をしている生徒は四七％（七九名中三七名）。また、よく読む本の種類として「漫画」を挙げる生徒は九二％（七九名中七三名）であったのに対し、「小説」を挙げる生徒は七二％（七九名中五七名）であった。この結果より、文学的な文章を読む授業に親しみを感じることができていないという実態が見られる。国語科の重点目標は「魅力的な単元開発」である。「魅力的な単元」を開発することが生徒の「自ら課題解決したい」という

意欲を喚起することができると考えた。

指導観

本単元では、文学教材「兄やん」の読解を通して「理想的なリーダー」について考察する。その後、「スタート☆トレーニング」、「運動会」の「光輝（かがやき）」単元や、道徳の教科書教材を参考にしながら、自らが考察した「理想的なリーダー」について再検討するという活動を設定する。国語科の重点課題として、「学びの振り返り」がある。この振り返りを国語科の授業の中だけで行うのではなく、「光輝（かがやき）」の授業の中で行うことで、国語科の授業で学んだ知識を横断的に活用する意識を高めていきたいと考える。

（3）単元の目標

「兄やん」の読解を通し、「理想的なリーダー」について考えることで、「リーダー」に関する認識を深化・拡充し、文学的文章を読むことが日常での課題について探究するための材料となることを自覚する。

（4）授業の実際

第一次　「兄やん」の読解……三時間
第二次　「理想的なリーダー」についての探究①……二時間
第三次　「スタート☆トレーニング」
第四次　「運動会」
第五次　「理想的なリーダー」についての探究②
※第三次以降の展開は「光輝（かがやき）」の単元として実施している。

本稿では、第一次と第二次の報告を中心に行う。

（5）単元の評価規準

知識・技能…文章中の表現を丁寧に見取りながら、作中人物の心情を読み取り、それぞれの登場人物の心情の変化を捉えることができている。
思考力・判断力・表現力…文章から読み取った内容を検討し、自分なりの「理想的なリーダー」についての考えをまとめ、自分とは異なる意見についてもまとめることができている。
主体的に学習に関わる態度…日常の課題を探究するための題材として、文学作品を読み深めることが有効であると気付いている。

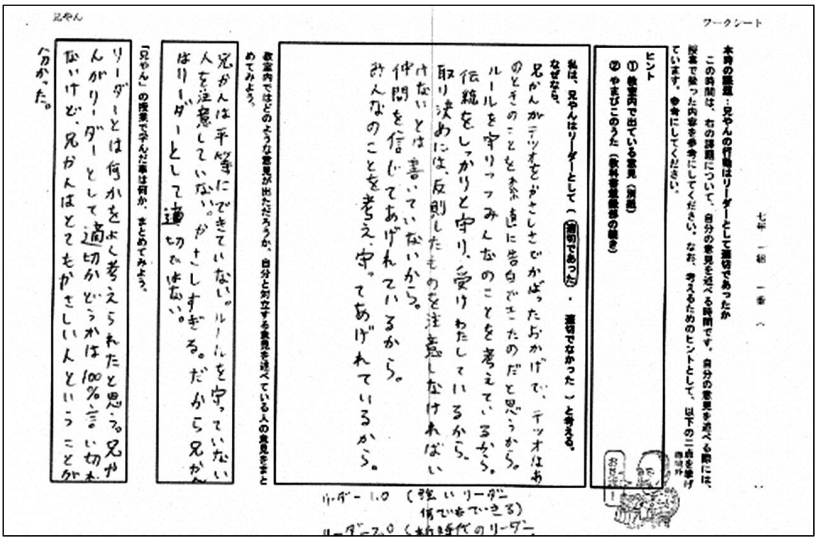
（6）授業の実際

第一次では、文学教材「兄やん」の読解を行った。初読の感想には、物語が大団円を迎えていることから、「兄やんはリーダーとして素晴らしい」といった感想が散見された。生徒の認識を揺さぶるために、「兄やんは本当にリーダーとして素晴らしい行動をとっていたのだろうか」という問いかけを教師が行った。すると、生徒から「確かに兄やんの行動によってみんなが満足する結果になってはいるけれど、よくよく考えたらこの結果は、兄やんが最後のじゃんけんに勝ったから可能であった偶然の産物なのでは？」という意見が生

徒の中からでてきた。そこで、登場人物の心情の変化について丁寧に読解し、登場人物が果たした役割を確認した。

第二次では、「理想的なリーダー」についての探究を行った。第一次で読解した文章は、「兄やんは直接テツオに注意することはなく、テツオの改心を待ち、兄やんの妹であるサチの行動もあってテツオは行動を改めた。最後の場面では兄やんの計らいにより、テツオもサチも満足する結果となった」という内容であった。第二次では新たに一年後のテツオの姿が描写された場面を読解した。この場面では、兄やんが中学生になり、テツオがグループの新たなリーダーに就任している。テツオはみんなの前で一年前に自分の身に起こったことを告白し、一年間苦しんできたことを述べ、取り決めを守ることの重要さをメンバーに語るという場面である。この場面を踏まえて、リーダーについて考えさせた。ここでは、教材である「兄やん」を読解した上での探究になるので、「理想的なリーダーとは」という問いではなく、「兄やんはリーダーとして適切だったのか」という問いについて考えさせることにした（図1のワークシート）。その結果、兄やんをリーダーとして「適切である」と考えた生徒は四三％（七六名中三三名）、「不適切である」と考えた生徒は二八％（七六名中二一名）、「どちらとも言えない」と考えた生徒は二九％（七六名中二二名）であった。「適切である」と考えた生徒の記述には、「兄やんがテツオをやさしさでかばったおかげで、テツオはあのときのことを素直に告白できたのだと思うから。」、「みんなのことを考え、守ってあげられているから。」といった意見があった。「不適切である」と考えた生徒の記述には、「テツオが改心したのはサチの行動に

図1　「兄やん」のワークシート



よるところが大きい」、「結果としてテツオは一年間も苦しむことになってしまったから。」といった意見が見られた。「どちらとも言えない」と考えた生徒の記述には、「兄やんは中止すべきだったが、結果として一年後にテツオは立派なリーダーになっている。」、「（稿者注：テツオに）注意をすべきだったとは思うが、相手の事を何も考えずにただルールを守れというのもリーダーとして正しくないと考える。だからテツオに同情したのは必ずしも悪いわけではなかったのではないかと思ったから。」といった意見が挙げられた。

第三、四次では、「光輝（かがやき）」の単元「スタート☆トレーニング」、「運動会」での活動の中で「リーダー」について実際のグループ活動をする中で考えた。

第五次では、国語科の単元、「光輝（かがやき）」の単元で学んだ内容を踏まえ、リーダーについて考えた内容を検討した。生徒の「国語の授業で習った兄やんの学習を生かして、リーダーにとって大切な考えについて考えることができた。また『兄やん』の授業では考えなかったフォロワーのことについても、兄やんの視点を使って考えることができた。」という振り返りからは、「光輝（かがやき）」の学習の中で、国語科の学びを活用している姿がうかがえた。

（7）実践を振り返って

本単元では、国語科の授業と「光輝（かがやき）」の授業を「内容でつなぐ」ことを意識して実践を行った。国語科の授業と「光輝（かがやき）」の授業で同じ問いを設定し、それぞれ別のアプローチから課題に取り組むことによって、教科横断的な学習を意識させつつ、魅力的な単元を開発することを意図している。「光輝（かがやき）」の学習と関連させることで、生徒の実態に合わせた学習課題を設定し、教室の内外で認識の深化・拡充を計ることができると考えている。

5　おわりに

本稿では、紙幅の都合で「内容でつなぐ」単元を紹介した。前述したように、「光輝（かがやき）」との関連の中で実施する各教科の授業は、「内容でつなぐ」ものと「方法でつなぐ」ものが存在する。「方法でつなぐ」単元については、第六三回広島大学国語教育学会において中学二年生を対象に実施した「卒業旅行コンペをしよう」という単元を報告している。

教科書教材にある「プレゼンテーション」の単元を、「光輝（かがやき）」につなげて構想したもので、教科書には、「話し手の意図や話の内容を分かりやすく伝えるために、資料や機器を効果的に活用して表現を工夫する」という目的が設定されており、四～五人のグループで発表するという学習活動が示されているが、本学校園の中学二年生は、二年間かけて行う個人探究学習に取り組んでおり、年度末に中間発表会を控えていることから、個人でのプレゼン活動を設定した。また、実践を行った直後に、修学旅行を控えていたことから、「旅行プランの提案」という課題を設定している。

学習後の振り返りには、「改めて、一から計画を立ててプレゼンをするというのはとても難しいと感じた。他の人達にも、それぞれ計

画の立て方が上手い人やプレゼンのつくりかた、説明の仕方が上手い人などがいていろいろな面で参考になったから良かった。国語の授業のみではなくいろんな教科でこのようなことをすることがあると思うので、使えるようにしたい。」といった、他教科との学びを意識することができている学習者が多数存在し、国語科での学びが、「光輝（かがやき）」や他教科につながっている様子が見られた。

以上、本年度の研究協議主題である「中学校・高等学校国語科のあたらしい授業にどう取り組むか」を意識して、報告・考察を行った。引き続き、教科横断的な学びを構想していきたい。

注

1　学校図書「中学校国語1」所収

2　中学校入学直後に実施される宿泊合宿

参考・引用文献

広島大学附属三原学校園（２０１８）『幼小中一貫教育で育む資質・能力　自ら伸びる子どもを育てる』ぎょうせい

広島大学附属三原学校園「令和４年度　第25回幼小中一貫教育研究会　要項」

（広島大学附属三原中学校）